

【調査記録】

地方競馬の変遷

—益田競馬馬主・大石正の聞き書き

関 耕平・平田直樹

(鳥根大学法文学部)・(益田医師会病院)

キーワード：地方競馬、聞き書き、益田競馬

摘 要

本稿は、益田競馬のある馬主からの聞き書きの記録である。本稿は、益田競馬の変遷過程を明らかにすることを目的としている。地方競馬は、花競馬、農耕馬としての利用といった段階を経て、現在のような競馬事業へと変遷していった。

はじめに—本稿の目的

益田市競馬事業（以下、益田競馬）は1948年に鳥根県馬匹組合によって開始され、その後、県主催、益田町主催を経て、1953年から益田市が主催、2002年8月のレースを最後に休止され、その後年度末をもって廃止された。2000年以降、益田競馬を含む全国8ヶ所の地方競馬が、累積赤字を抱えたため相次ぎ廃止され、さらに、存続しているほとんどの地方競馬において、廃止が検討されている。

競馬事業は地方財政上、収益事業として位置づけられている。実際にこうした競馬事業を実施していた自治体にとって、かつてあげた収益は無視できないほど巨額に上ることが多く、地方財政論にとって興味深い分析対象である。しかしながら、地方財政論のなかでは、これまでほとんど取り上げられることはなかった。その意味で、益田競馬は大変興味深い分析対象であり、地方財政的側面＝財政貢献や累積赤字の変遷・実態、競馬事業についての時期区分や各時期の特徴の分析が必要である。これら詳細な分析は別稿を期したい。

本稿は、2007年12月と2008年10月に実施した益田競馬の馬主・大石正氏からの聞き書きの記録であり、これを通じて益田競馬の変遷過程を明らかにする。

なお、本稿は、平田直樹による2007年度 法文学部法経学科 卒業研究「地方競馬の存続の可能性とその意義—益田競馬にみる地方競馬の存在意義—」の添付資料を大幅に加筆修正したものである。

1. 生い立ち・地域や家のこと

わしは1937（昭12）年生まれ、うちは代々馬が好きの家だった。小さい頃から馬が好きで、絵を描くといえば馬を描いていた。

馬と一緒に兵隊に、戦争にあって親父の兄弟も馬も戦闘に加わっていたと親父からは聞いてい

る⁽¹⁾。おじいさんも益田競馬がない時期は、浜田、宇部や小月にまで出走させていたようだ⁽²⁾。

親父は激戦地の硫黄島から片眼を負傷して帰ってきた。負傷したからこそ前線に立たずにすんで帰ってこられたんだろう。帰ってきて直後のまだ益田競馬がない時期には人を雇って宇部や小月にまで出走させたりしていた。宇部や小月が閉鎖になってからは荒尾⁽³⁾にまで行っていたなあ。代々うちは、妻も含め、女性が苦勞をする。わしは競馬だけだが、親父はそれに加えて鉄砲、狩猟もしてたのでおふくろは苦勞していたと思うなあ。

ここ益田市の喜阿弥(きあみ)には昔から牛より馬を飼っている家が多かった。このへんは合併する前は小野村とっていた⁽⁴⁾。近くの白上(しらかみ)や中西⁽⁵⁾にも馬を持っている農家は多かった。

2. 花競馬⁽⁶⁾について

祭の時には花競馬をやった。花競馬で勝つと優勝旗とちょっとした景品がもらえた。賞金というのはなかったなあ。うちにも優勝旗がたくさんある。3年取り、5年取り、10年取りとって連続で優勝したこともある。大関、関脇、小結。一番強いと大関という優勝旗・称号をもらった。大関や関脇の旗は赤や青の色(写真1)。優勝旗の先に槍がついていて、近所の人が芝居に使わせて欲しいとよく借りに来ていた。

喜阿弥の、今は公民館になっているところや、白上や中西でも花競馬をやった。喜阿弥では10月の最終日にお祭りが三日間ある。一日目が「よどのぼん」、次が「ひのはれ」、最後の日が「のぼりだおし」。のぼりだおしの日に花競馬をするのが恒例だった。よそからも馬を連れて出走させに来ていたよ。

いろんな場所へ馬をつれてやったよ。須佐、江崎⁽⁷⁾のお寺、萩の港、小月でも花競馬をしにいったことがある。江崎では12月3日のお祭りには必ず、馬を連れて行って。優勝旗を取るのを楽しみに馬を連れて行った。あの当時は本当に盛んにやっていた。山口の秋穂⁽⁸⁾からも来ていたなあ。津和野のOさんという競馬好きな人がいて、ぜひ来てくれとって花競馬をしに馬を連れていっ



写真1：花競馬の優勝旗。「萩市制30周年記念競馬・関脇・萩市萩文化電機商会」とある。山口県萩市制は1932年からであるため、この優勝旗は1962(昭37)年のものと推察される(2008年10月、撮影者：関)。

た。津和野から歩いて馬を連れてきたりもしていた。行ってみたら雨のせいで三日も延びて。そのときはこの地域からは5人で5頭くらい参加して、優勝旗を3本くらい取ったよ。三日間泊り込んで参加したものだ。

その当時の花競馬はどこもだいたい馬場が小さくて、100m、150mもあったろうか。直線は30mくらい。1日7レース、それぞれ5頭が出馬して10数周くらいまわった。

すぐに勝負がついたよ。

3. 花競馬の思い出

喜阿弥のお祭りといったら、必ず親戚を呼んで酒を飲んで、ドンチャン騒ぎをして、競馬をみながらヤジって。土手にへべレケになって寝るようなもいて。見に来る人は昼から一杯飲んで、やあやあ騒ぎながら。馬を出す人は優勝旗を狙う。花競馬は、つまり花（ご祝儀）を競馬に打つ。芝居でも花を打つでしょ。その花で商品をいろいろ買ったり、経費にしたりする。優勝旗はその当方で1万円くらいしていた。馬券を売るわけではないので、ただ馬が走るのはおもしろいから、それを見に。やじを飛ばしながら観戦する。どこでもやるわけじゃなくて、馬が好きでないところにはむかないだろう。

飲んだくれが手をたたいて喜んで、たまに馬の前に転んだりして、応援していた。益田競馬は馬券が目的だから、手を叩いたりする応援は見られない、博打だから。花競馬というのはただ馬が好きだから、親戚はその家の馬を一生懸命応援する。和やかだったよ。公営の競馬とは違った雰囲気があったね。

馬に乗る人は今とは違って、誰でもよかった、今は免許がないと乗れないからね。弟も乗ったことがある。初めて買ってもらったカチヤマというハシカイイ（かんしゃく持ちで気の荒い）馬に乗って、3周目で落っこちたよ。

喜阿弥の祭では親戚の家に行くのが普通だった。今は仕事で祭に来ない人もいるが昔はあまりそういうことはなかった。親戚が来るのは「よどのぼん」、祭の初日。「ひのはれ」にお宮の祭りをやって、「のぼりだおし」最後の日の昼に花競馬をしていた。

4. 花競馬の最後

戦前からずっと、益田競馬が始まってから⁽⁹⁾も1960（昭35）年ごろまでは花競馬があった。花競馬の時代、最後に走ったのはヤマゼンという小回りのきくいい馬だった。1961（昭36）年に結婚したが、その頃にはもう花競馬というのはすっかり減ってしまったと思う。

5. 高校の思い出

益田競馬ができるのと知って、うれしかった。島田大太郎という名士がいて、県営から市営になるとき⁽¹⁰⁾など、畜産組合の働きかけで復帰したと聞いている⁽¹¹⁾、詳しくはわからんが。その頃、自分は子供だったが家に馬がいて、もちろん農耕馬。農耕馬でありながら競馬に出す気だから、中半という種類の馬⁽¹²⁾を買っていた。

高校の同級生のWが、ハツミザクラといういい馬を持っていてなあ。高校入学すぐにお互い馬が好きで仲ようになった。当時、吉田の駅前⁽¹³⁾に市場があって吉田地区のTさんという馬喰（ばくろう）さんがいて、北海道から6頭も買ってきていて。今は、自分で直接買いに行くが、昔はその馬喰さん、いわゆる仲買人が北海道から馬を連れてきていた、「こういう馬はいらんかね」という風に。

高校から帰るときに馬がつながれている場所に行ってWと一緒にずっと馬を見ていた。Wが「いい馬がいるから親に買ってもらえ、これを買ってもらえなんだから高校に行かないと言えば買ってくれるだろう」と言って。親父に買ってくれといってもすぐにはいいとは言わん。Wがいったよ

うに高校行かんと言ったらびっくりして、買ってくれた。それでカチヤマという北海道から来た馬をはじめて買ってもらったんじゃ。中半のいい馬でね、農耕にも使った。それまで親父は使われた、年のいった馬を買ってきて使っていたんだけど、カチヤマは若くていい馬だった。その頃、馬1頭が平均30万くらい⁽¹⁴⁾、安いのは10万、いいのは100万以上。自分たちが買うのは15万から30万の間だったが、カチヤマは100万円したんだろうか、わからんが。カチヤマはかなり勝った。その馬を山口の小月（競馬）へ連れて行ったりしていた。

Tさんというこの馬喰さんは、マンシュンやユーヤクといった、いい馬を売っていた。当時は速歩という交互に足を出さなければいけない競走をやっている、この馬は足が見えないくらい速かった⁽¹⁵⁾。

うちの親父はもう一人の別の馬喰さんと親しくて、親父も信用していたので、ほとんどその人との取引だった。寿命が来た馬なんかもその馬喰さんに引き取ってもらっていた。

6. 馬主をはじめた頃

高校卒業して1957（昭32）年から馬主を始めた。高校卒業後は農協に就職したが、給料が月4,000円だった⁽¹⁶⁾。馬がレースに勝てば、3,500円だったかな、いっぺんにそれくらい稼げる。だから、1年で農協を辞めて、馬主になった。自分の家から競馬場まで馬を1時間くらいかけて歩いて引いて行った。厩舎もなかったり、あっても小さかったので競馬場の裏の松原・松林につないでおいておいた。家から競馬場に馬を連れ出していたので、馬小屋スペースのこともあって1-2頭しか持たなかった。

1開催が6日あって、今は1開催6日のうち1回、多くても2回しか出さないが、昔の馬は6日あったら毎日走らせていた。今の馬は1日1回の調教だが、当時は必ず朝と晩の2回、調教に出していた。昔の馬は強いなあ。カチヤマもそういう馬だった。

当時はドーピングなんてのはないから、家を出る時にマムシを馬に飲ませたり、お茶っ葉を嗅がせたり、家族総動員だった。家族が入った後の風呂のお湯をつかって、ムダワラといって馬にマッサージしてあげた。6日も毎日レースに出るので。

そのころ小月や大分の中津の公営競馬まで、馬を連れていつてきたこともある。今のように馬運搬の専用の車なんてのはなくて、普通のトラックに丸太で囲い枠を作って、幌をかぶせて、馬運車といっ呼んでいた。

当時馬のえさなど、いくらかかったか分からないが、圧ぺん、大麦をつぶしたものを食べさせていた。これを食べさせてしまったら脂肪がつくので、今は、馬を軽くするため、燕麦を一日6升ほどたべさせる。当時は、違った。大麦をつぶしたもの。一ヶ月3万円ほど食費だけでかかっていた。多くてもそのくらいだったろう、決して安くは無かった。今は厩舎へ預ける預託料、月15万円だからね。

7. 馬と一緒に山仕事・田仕事へ

昔は、耕運機とかトラクターがないから、牛馬で田を鋤いたりしてた。競走馬も競馬専属ではなく、百姓・農耕にも出しながら休みのときに競馬をやらせるというような形でやっていた。競

馬が無いときは、山の倒木を引っ張り、田仕事をやっていた。当時は家に馬をつないでいたので、1-2頭しか持ってない。だから、よその農耕の仕事もしないと成り立たない。

今は開発して農地にしてしまったけど、その当時はまだこの辺にたくさんの山が残っていたので、よく木を切り出しにいった。木材業も同じ集落内にあったから、そこから頼まれて。昔は架線がないのでみんなで木を引っ張って切り出す仕事を請け負った。同じ地域の5人くらいでそれぞれ馬を引いて。一番印象に残っているのがヤマゼン。ヤマゼンはアラブ種のいい馬だった、小回りもきいて、花競馬をやった最後の馬でもあったから。わしはヤマゼンを引いて、若かったから一番作業がきつところを請け負って。山から帰ったら、みんな酒が好きで、馬をつないで呑んでいた。みんなそれが楽しみだったようで、毎晩呑んでいた。わしはあまり酒が呑めないからちょっとつらかったなあ。馬が行くと、人が手伝いにいったときの報酬の3-4倍は出た。

でも田仕事のほうがいい稼ぎになった。小浜地区⁽¹⁷⁾という近くのところに1-2反の小規模な田んぼがいくつかあって。牛馬は持っていない地域だった。請け負いで田おこし、あらおこし、くれがえし、水入れをした後に、しろかきもした。しろかきは8の字に掛ける。あらおこし、しろかきは一日1反しかできない。1反当たり1万円、一日1万くらいになった。昼にはご馳走になる。漁業もやっていた集落なので魚をもらって帰った。あらおこしは本当に大いに儲けた。そのかわり、田植えの時期に限定された稼ぎだったがね。高校卒業後農協を1年でやめて馬とともに生活をしたのも、こういう稼ぎのほうはるかに良かったから。

小浜の人たちは「うちの馬が来た」といって喜んでた。米が高く売れる時期だったので、人を雇っても稲作をしていた。農業も漁業も良かった時代だったなあ。その当時米を作っていたところ、1町くらいかな、今は全部、耕作放棄地になってしまっているよ。いまは作っても赤字だからね。

8. 農耕馬としての利用をやめた時期

マサハイといういい馬がいて、アラブ種だった、よく山仕事に出たもんだ。レースに出せばレコード出すようないい馬だったなあ。

田仕事に連れて行ったところ、馬の足に手綱が絡まって、手綱を放したら、道路のほうに行って自動車に轢かれてひざを折って死んでしまった。それが1964(昭39)年か1965(昭40)年ごろ。それ以降は、この辺の地域では馬を持っている人は、馬を田仕事や農耕馬としては使うことはしなくなった。機械も導入され始めたし。それからは、みんな自分の馬を厩舎に入れた。だけど、自分の手で引く耕運機、テラーよりは馬のほうが農業に向いていた。トラクターは馬よりも良いけど。

農耕馬として使わなくなるのは、耕運機、トラクターが入ってきてからだけど、この辺の地域ではマサハイの事故がきっかけだった。小浜の人たちはちょっとのあいだ困ったが、耕運機を買っていた。馬を連れて行かないので困ってしまって買わざるを得なくなったのではないかな。

9. 益田競馬、はじめのころ

サラブレッドはエリート、益田にはいなかった。益田競馬はほとんどアラブか中半。別々に

レースをしていた。益田競馬の最初のころは速歩と平地競争の2つの競争があった⁽¹⁸⁾。速歩競争は足をそろえて飛んではいけない、はやあしって言う。フクスケ、マンシュン、ユウヤクという速い馬がいて、アメリカントロッターという種類の馬がこの速歩の専用の馬。平地競走と速歩は1965（昭40）年頃までは半々だったと思う。速歩にはあまり魅力がなくて、わしは興味がなかったが。

ゲートはなく、開く扉がなくて、スタートはいいかげんだった。いつごろかは分からないが。糸を引いて「まだまだまだ」「GO！」とスタートしていた⁽¹⁹⁾。

そのころが益田競馬で一番華やかなころ、おそらく馬券の売上げもある程度売れたころだと思う。競馬で出た黒字を益田市に持って行ってまかっていたはず。かなり市が儲けていたはず。1962（昭37）年ころには何百万も繰り入れして他の赤字を補ってきた。だから、赤字が多少出てもなかなかやめられなかった。いままで競馬の黒字を流用してきた時代があったから赤字になったあともやめられなかった。

雰囲気は博打が絡むわけだから、声を出して必死になって応援するという雰囲気ではない。ファンは花競馬のころとは変わる。馬が走るのがおもしろいといってやじを飛ばしたり、飲んだくれが集まるのと、大穴があたりはしないかというギャンブル好きが集まるのと、ファン層は違う。雰囲気も違っていった。

10. 当時の馬の世話

わしはなんにしても馬が好きじゃけえ、馬の世話をするのが好きだった。敷き藁をして飼葉を付けてあげ、ムダワラといって湯で体を洗いマッサージをしてあげる。フロの湯できれいに洗ってマッサージをしてあげた。レースが終わったら連れて帰って、晩には馬を先に洗っていた。馬が先に風呂に入っていた。

昔は馬主（うまぬし）であり、馬丁（いまでいう厩務員）といって馬の手入れをすることができ、攻め馬（レースに向けた調教）といってトレーニングができ、すべてができる。わしはオーナーであり、厩務員であり、下手だったけど調教もやりよった。唯一レースだけは乗られない。

11. 馬の世話ができなくなって

オーナーが馬の世話をできないことになってしまったのは、残念なことだった。家から馬を競馬場に連れて行くなんてことはできなくなったんだ。預託制度が厳格になって調教師に馬を預けなくてはならなくなった⁽²⁰⁾。厩舎制になって以降は、自分ですべて馬の手入れをすることは出来なくなった。馬好きには本当につまらん。1965（昭和40）年以降だったと思うな⁽²¹⁾。馬の世話ができなくなるのがいやで、親類名義で馬主登録して、本人が厩務員として馬の世話をし続けたなんて人もざらにいた。だんだん預託制度が厳しくなってきた⁽²²⁾。そのときは、タバコの栽培をしながら、馬を3頭飼って、それで稼いでやっていっていた。

昔は、調教師と厩務員と騎手と馬主を明確に区別する様な制度はなかった。規制が自然とできた、厳しくなる制約ばかりできた。だから馬が好きで馬持ちでありながら馬の世話をし、競馬に出走させるという、草競馬、花競馬のような雰囲気はなくなってしまった。ギャンブルだから

仕方がないけど、完全に分担になった。馬主でも、趣味でやってるという人は馬を手放していった。

騎手はレースの前の晩は、不正につながるようなことがないよう監禁。調整ルームに入れられる⁽²³⁾。ギャンブル。趣味的な性格はなくなっていく。

いまは調教師さんに預託料を払って馬を全部預ける、そして厩務員とって馬の世話をする人、攻め馬をして騎乗する人、騎手、分担している。みんな金が要るから、それを全部自分でやれば、賞金が自分のものになる。今、賞金は、調教師1割、攻め馬5分、馬の世話をする人に5分、騎手に5分。馬主は馬を持つだけで馬を触ることもできん。

かつては自分が馬もちでありながら、世話ができ、調教ができる。ただレースに乗ることはできなかったが、その時代は、賞金がみんな入る。預託料もいらぬ。だから、馬を3頭持っていたら生活できていた。レースがないときは農耕に出すしね。

12. 競馬から離れ農業に専念

馬は1975（昭50）年まで持っていた。1975（昭50）年に近くで国営開発ができて。親に百姓をしないと自分の山がなくなるから、といわれて。国が農地造成、大型の開発をする⁽²⁴⁾、大規模な農家にならなければ土地・山が人手に渡ることになって。この辺の農地造成は失敗。地元負担金が多すぎて酪農なんか早々と倒産してしまった。

とにかく、1974（昭49）年だったろうか、妻と相談して、人に財産をやるわけには行かないので、葡萄づくりをやり始めた。そのときに馬主をきっぱり辞めた。馬3頭、馬具から何からみんな売り払って覚悟を決めて農家に専念した。借金して始めた葡萄を一生懸命やらないとやれんから。その後から20年間、競馬は一切していない。船橋から馬を買ったばかりだったけど、それを含め3頭すべて手放した。地元で生産組合を作ったりして、ずっと農業に打ち込んだ。

わしはやむをえず馬を売って事業を始めたわけだが、本当の馬好きは、その後もずっと馬を持っていた。競馬を続けるか、百姓をやるか、わしは百姓を選んだ。隣の同級生のWは、そのとき競馬を取ってとうとう調教師になった。今思うと、あの時が分かれ目だったなあ。

13. 馬主をやめていた時期の益田競馬

馬主をやめた1975（昭50）年以降、競馬の経営が傾いてきたと思う。わしが馬を持っていたころが益田競馬の全盛期だったと思う。3頭持っていれば馬で生活ができていたし、それまでは競馬だけじゃなくて農耕馬としてももうけることもできていた。廃止っていう話は全然でなかった。全てが充実していた時代、一番いい時代に馬主ができた。

それ以降は息子が戻ってきて、わしは葡萄の事業をする、息子は厩務員として馬の世話をする。競馬がだんだん下火になってきて⁽²⁵⁾、儲けにならないから、息子も一緒に葡萄の事業をやるようになった。今では息子に農業を任している。

平成に入って、一時黒字が出て、経営が持ち直したように見えるけど、もうだめだったなあ。利益にはもちろんならない。ただ好きだからやるというかんじ。競馬をやめた年（1975年）までとは雰囲気が違う。駐車場はがらあき、いつも決まった顔しかいない。馬券も売れない。家族連れはほとんどいなかった⁽²⁶⁾。

パドックは日本一立派。けど観覧席はガラガラ。パドックといって出走前の馬を見るとき、観覧席に年寄りが少し残っているとしても、観客の人数といえばパドックを囲むのがせいぜいだったと思うよ。

でもその時期はわりと女性のお客さんが多かった。若手騎手と結婚した人も多かったから。当時、吉岡牧子騎手⁽²⁷⁾の効果は集客面でかなりあったと思う。「マキちゃん効果」。彼女は競馬協会（地方競馬全国協会）のひとと結婚した。もう一つ全国的に有名なのはウズシオタロー⁽²⁸⁾だろう。これは白上地区の馬主さんの馬。

14. 馬主を再開

1995（平7）年、また馬主を本格的にやり始めた。ある程度事業（農業）の見通しがついてから。馬主会（ばしゅかい）から抽選馬の購入を相談されて、徐々にまた馬主をやり始めた。葡萄の事業を息子に渡した記念に馬を2頭買った。デラウェアー、キョホー、の2頭。デラウェアーは強かったよ。ほかにも福島まで馬を買いにいったこともあったよ。

金の余裕がないとそういうことはできない、言ってみれば趣味・娯楽が半分。最近では利益なんか考えられない、地方競馬は全然だめ。

益田競馬場は日本一小さい、つまらん競馬場だから、だいたいよその競馬場で使い物にならないような安い馬を馬主は買っていた。一旦デビューしたら名前は変えられない。安い、年をとった馬がわりと多かった。競走馬とすれば益田競馬は最後にいきつくところ。わしは、それでも新しい馬を買ってきた。競馬をやっていると、他の競馬場の調教師と懇意になる。そうするとその調教師にいい馬がいると紹介してもらえる。

益田競馬にかかわる人はほとんどが地元の人。日本一小さな競馬場ということもあって、ほとんど地元の人が支えていた。調教師も喜阿弥地区だけで2人、一時は3人いたなあ。馬主の正会員には市内の者でないとなれなかった。今、馬を出している福山競馬でも、わしのような市外の者は準会員。

遠征には行った。中津の廃止のとき⁽²⁹⁾にもいった。交流試合もあったし。益田競馬にもったいないくらい良く走る馬は、違う競馬場に移籍させたり、益田競馬の開催が無いときは中津競馬、荒尾競馬に連れて行ったりしていた。益田は開催が少なかった。その開催も発売成績がいいと開催数も増えていた。

15. 共同購入・抽選馬について

益田競馬では共同購入というのをしていた⁽³⁰⁾。馬主会が市から補助を受けて、北海道で30頭一括購入してくる。その馬を、申し込みをした人、馬主がくじを引いてして購入する。馬の輸送費については馬主会が負担する。市が、馬が足りないからということで、市の予算を出して馬を買ってくる。共同購入は古馬でも新馬でも行われていた。だいたい30頭、1頭80万として、2400万円くらい補助していたのかなあ。新しい馬を買うと馬券の売上げも違う。デラウェアーも抽選馬で80万円。山形県の上山競馬⁽³¹⁾から古馬20万、子馬は80万。新しい馬も入ると客も集まる。小さな競馬場だから、あの馬が出る、とかいって応援に来ていた。

16. 益田競馬での賞金や出走手当など

益田競馬は馬が少ないから、1開催6日間で2回出走できていた。福山競馬は(登録されている)馬が多いから1開催に1回しか出走することができない。1回出走すれば出走手当が出る、だからたくさん出るほうがいい。福山は1開催に1回しか出走できないが、出走手当がかなりあった。今はそれが6万円くらいだから、それを考えると、当時の益田より今の福山競馬のほうが厳しいかもしれん。福山の預託料が1頭、毎月16から18万くらい、調教師へ払うから、多少勝ってくれんと困る。

百姓をしながら、自分の馬が出るときは競馬場に行って手を叩いて応援するのが楽しかった。馬券は買わないけど、馬には金をかける。元は取れなかったけど、維持費ぐらいは馬が稼いでくれていた。

賞金は、一度やめた時(1975年)と再開した(1995年)ころを比べると、だいぶ下がっていた⁽³²⁾。1975(昭50)年ごろは、福山は賞金が何百万とあったからね。益田競馬は、賞金も手当も、預託料も安いんだよ⁽³³⁾。益田の場合は趣味とかで、金を勘定してやっていたという人はなかったんじゃないかなあ。趣味での馬を持つということが多かったと思う。そこがほかの地方競馬とは違うところだと思う。

高知は益田よりも前から苦しいっていわれていて、何とか今までやっているけど、今も相当苦しいと思う。賞金が凄く安い。10万以下だろうね。福山は勝って16万くらいだから。九州も10万くらい。ちょっと前までは25万くらいあったんだからどこも馬主は苦しいはず。

わしらは、馬が好きで馬券買うが好きじゃなくない。家族が馬の名前を付けたりして、楽しんでる。屋号や自分が作った葡萄にちなんだ名前とかね。妻が付けたり大阪のおじさんが付けたり。

3頭はいないと地方競馬の馬主はできない。1頭だけだとリスクもあるし、損をすることが多い。3頭いないと地方競馬では成り立たない。たえず3頭いる。交代のペースはほかの馬主に比べて速かったよ。まだもう少し走らせてみたほうがいい、といわれても、すぐ新しくした。(出走)手当はあるが賞金は取れない、そういう馬はすぐに取り替えて新しい馬にする。それを考えると3頭は常に持っておかないといけない。

17. 競馬場廃止の兆候

競馬が集客力を無くしたこと、それもあるが、不景気、バブル崩壊がすべてに影響したんだと思うよ。1998(平10)年ごろから、やめるとかやめさせないというのは話がされていた。馬主会の役員になったことが無いから、詳しい運営の話はわからないが。賞金はだいぶ下がっていた。市は自然消滅を願うから、ますます厳しくしていく。預託料を下げないから、調教師はいいけど、馬主は賞金と(出走)手当が下がるからますます苦しくなる。だから、馬が減っていく。主催者からやめると言えば、補償がある。馬が減って行って、自然消滅してくれれば、主催者としてはいいわけだから。

たぶん馬主会の役員には、廃止に向けての話があったんだろうと思う。わしはヒラの馬主だから知らなかったけど、みんな抽選馬を買わなかったからね。存続検討委員会といっても、市会議

員や県職員、税理士が中心。やめるというのは聞いていたが、それがはっきりしなかったから、2001（平13）年に2歳の抽選馬を2頭買った。そしたらすぐに廃止になって、デビューしたばかりの馬を殺すわけにはいかないから、福山に持って行った（移籍）。上では、廃止するという話しがどんどん進んでいったんじゃないかと思うよ。本当に止めるかどうかわからないから、わしは買ったわけよ。廃止の直前に抽選馬を買っても補償がないと、役場に向けあったが、益田の場合も馬主以外の関係者にだけ見舞金、馬主には出なかった。

市としては、自然消滅を願っていたんじゃないかなあ。そういう感じだね。廃止の5年も前からやれんって言っていた。益田市が財政再建団体に陥ってはいけないというので廃止した。止めるって言ったときには、みんな惜しがったなあ。益田には名だったものが何もない。今は、石見空港、グラントワがあるけど、昔は競馬場だったね。

前の県民会館は競馬の黒字で作った。だから、廃止の話は出てもなかなかやめられなかった。競馬場の黒字で市の財政を賄ってきたという歴史があるんだから。

18. 益田競馬の廃止

トラブルもなくいい終わり方といわれるけど、廃止するとき、益田市から調教師、厩務員、騎手は見舞金をかなりもらっているからと思う。市が調教師、厩務員、騎手については見舞金をかなり出したから、穏当にいった。個々においてはいろいろあったかもしれないが、補償が穏便にいったから、わりとみんな穏当だった。中津は本当にひどい、哀れなものだったよ⁽³⁴⁾。遠征にも行っていたから、馬主の訴訟にも頼まれて参加した、全部で30数人くらいの馬主。

わしは競馬が好きだから、益田競馬の廃止は寂しいなあとは思ったけど、市を恨むとかはなかった。馬主は苦しければやめればいい、他の仕事を持っているからそんなに困らない。しかし、本当に困るのは調教師とか騎手だろう。馬主は、そろそろやめると思えば馬を買うのをやめればいいというだけだったけど。痛手を負ったのは調教師だろうね。

自分はほんとに自分が納得できた。しょうがないと。市に対する恨みというのはなかった。他の馬主さんは知らないけど。益田だけじゃなくて、全国的に地方競馬が厳しいということだから。益田だけ悪いってなったら、恨みもある程度あったんだろうけど。

19. 益田競馬、最後の日⁽³⁵⁾

自然に涙が出た。終わりかのおと思って。私はもともと百姓だから、これからどうやって生活しようというのは思わなかった。益田の競馬もこれで終わりかのお、これで競馬をやめないといけないのかのお、やめたくはないけどのお。

最後の時はたくさんの人が集まって名残を惜しんでいた。本当に多くの人 came⁽³⁶⁾。このあいだ、大相撲が来たけど、それよりはたくさんの人が集まったよ。

益田競馬に予想屋が1人いたが、止めるって聞いたときには、かわいそうに顔面神経痛を患っていたよ。

20. 福山競馬のこと

益田競馬がなくなってからは福山競馬に馬を出している。福山競馬は紳士的だね。上半期と下半期で分けて、上半期で黒字が出たら下半期で賞金・手当を1万円上げたり。努力している。確かに馬も減った。でもそのぶん、下のクラスの馬は1開催2走出来る。そういうふうにして福山の場合は、主催者がやめまいとして、いろいろ努力をしている。益田はそういうことをしなかった。自然消滅を狙っているのか、主催者はあまり熱心に改善策というのはなかった。結局赤字再建団体に落ちないうちに、赤字が15億円にならないうちにやめようとしてた。

福山の場合は、馬主が遠くにいても、レースのたびにしがきを出すとか、JRAの認定競走を引っ張ってくるとか、競馬事業を続けようというのがよくわかる。このあいだ、デラノキセキという馬がレースに勝った。1着、25万（円）の賞金。上半期で黒字が出たから、少し出走手当が上がっている。

券囲気も（益田とは）違う、すべてが熱心。不景気で経営が厳しくなるのは一緒だが、福山競馬は主催者が一生懸命。お客さんについては、馬券を買う人も少なくなるし、大口で馬券を買う人も少なくなったから売上は少なくなっている。ファンは減っている、金の余裕もなくなってきているんだろう。それでも福山のファンは熱心。益田競馬の場合は、一般のファンは、あまりきついようならやめたほうが良いという意見が多かったように思う。

福山はアラブのレースを最後までやっているところなんかも熱心だよ。

やっぱり、益田競馬と違うのは、何とか続けようという努力。主催者の努力が違う。それでもファンには年寄りが多い、年金でやる。「年金競馬」だよ。景気が悪い、時勢だろうね。

21. いきがいととしての馬主

いまでは益田市内で馬主は4人だけになってしまった。昔はよけいおったがのお。

わしは、馬があるから、仕事にやりがいをもつ。馬主をやっても儲けにはならない。損得を考えたらやるべきではないけど、パワーがもらえる。それがあってほかの事に精を出すことができるんだと思っている。「あんたは早く馬に会いたいんじゃない？」と妻は言うんだけど、そのとおり。馬に会いに行くために、農業をがんばる。馬を買いたいっていう気持ちがなければ、仕事は大儀で。もう引退したんだから、普通は続けられんけど、とにかく、好きなことをやろうと思ったら働かないと、怠けていたら家族からも苦情がでるし、家計にも影響が出る。

馬を離したくないから、一生懸命やる、やっぱり仕事にも張り合いが出てくる。今は柿の収穫をがんばっている。本当に馬が好きだから、妻には競馬だけは続けるって言い続けている。妻もレースを応援するのが好きで。レースは見たいが、自分が見ると負けるといって、レースを陰からちょっとだけ覗いたりするんだ。

今は、福山に行くんだけど、競馬のおかげで、自分の馬の情報を見るためにインターネット、携帯やメールを使いこなせるようになった。あと、福山競馬に行くのに便利だからハイブリッドの車を買ったんだよ。

このあいだも1頭、馬を買った。いまは、それを楽しみに仕事をしている。



写真2：現在の競馬場のゴール地点跡地。当時のまま
で残されている（2008年10月、撮影者：関）。



写真3：現在、競馬事務局・観覧席の建物は、場外馬
券売り場として利用されている（2008年10月、撮
影者：関）。

付記：本稿作成にあたり、聞き書きに応じてくださった大石正氏、ヒアリング調査・資料調査に多大なご協力いただいた益田市役所の当時の担当職員の方々、貴重なご示唆をいただいた北海学園大学・古林英一氏に厚くお礼申し上げたい。いうまでもなく、本稿に関する誤りその他一切の責任は筆者らに帰する。

〔注〕

- (1) 「軍用馬は、農家の飼育馬を随時徴発して使用しており…（明治）32年（1899年）12月には陸軍省令に基づき「徴発馬四事務心得」が作成されているが、これは前もって各町村で馬匹調査を実施し、徴発に際して早急に対処するために作られたものである。命令が出された時は、指定の時刻までに浜田町（現浜田市）まで連れて行くことになっており、賃金は支給されたが農民にとっては問題の多い制度であった。…この制度は…昭和20年の戦争終結まで続いた。」（益田市誌編纂委員会、1978、769頁、（）内筆者）。
- (2) 浜田競馬は島根県浜田市に1929（昭4年）から1937（昭12）年まで、宇部競馬場は山口県宇部市厚南区に1946年（昭21）年から1953年（昭28）年まで、小月競馬場は1931（昭6）年から1963（昭38）年まで現在の下関市に存在した（地方競馬全国協会、1972、318頁および330-333頁）。
- (3) 熊本県の荒尾競馬場のこと。
- (4) 小野村は1952（昭27）年8月1日に合併して益田市になった。
- (5) 白上は中西村の中にある大字。小野村と同時に合併した。
- (6) 草競馬、祭典競馬ともいう。祭典に際して娯楽のために行なわれた競馬で、集落の行事として明治の終わり頃までは全国各地で定着していたが、その後、洋式競馬に移行していったとされる（地方競馬全国協会、1972、13頁）。益田市周辺においては比較的残っていたと考えられる。「戦前から益田町は石勝神社前で、高津町は河畔で、吉田村は駅前広場で随時花競馬を開催し、地区民に親しまれていた。」（益田市誌編纂委員会、1978、383頁）。
- (7) 現在の山口県萩市江崎・須佐のこと。江崎は喜阿弥からは10km程度の距離。
- (8) 山口市秋穂。山口県の瀬戸内海側。
- (9) 益田競馬場の第一回の開催は、1948（昭23）年10月。
- (10) 県主催の開催は1949（昭24）年からで、益田市（当時は町）へと移管されたのは1952（昭27）年である（地方競馬全国協会、1972、320頁）。
- (11) 島田大太郎氏は自民党の益田市議会議員で、1952（昭27）年の第1回から1976（昭51）年の第7回の市

- 議会選挙での当選が確認できる（益田市誌編纂委員会、1978、314頁）。益田競馬に関連する具体的な活動等については不明。
- (12)日本の競馬は、大きく軽種馬（サラブレッドやアラブ系などの競走馬）と重種馬（曳き馬やばんえい競走向け）に分かれる。中半とは中半血種のことで、中間種と軽種馬の混血馬を指す。中間種とは軽種馬と重種馬の混血馬のこと（鈴木、2000、164-167頁）。
- (13)現在の益田駅。
- (14)『島根県統計書』の記載によると、役馬の金額は1952（昭27）年3月の、牝45,000円、牝47,000円、を最後に記録はない（『島根県統計書（昭和27年度版）』『農村物価』224頁）。
- (15)地方競馬全国協会（1974）によれば、「（益田競馬では）昭和35年9月下旬から10月上旬にかけて秋季競馬を2開催実施したが、騎乗速歩が5競走に平地が7競争で、出走馬は制限が非常に軽く、登録馬であれば大体出走できた。従って、アラブ系種や軽半血種よりも中半血種の馬が多かった。特に速歩馬のAクラスにマンシュン号とユーク号という、…中半血種…があり、…払戻金を受け取るのも忘れさせるほど速歩競争の面白味を十分に発揮して満足させてくれたものだ。」（502頁）とある。
- (16)参考までに、1957（昭32）年当時の島根県下の常用労働者（20名以上雇用の事業所）の平均月給が14,007円で、最も低い業種（ガラス土石製品製造業）が7,534円となっている（『島根県統計書（昭和32年版）』278-281頁）。
- (17)喜阿弥と同様、旧小野村内の集落。
- (18)益田競馬の騎乗速歩は1972（昭47）年9月に廃止され、これをもって日本における騎乗速歩競走が幕を閉じた（地方競馬全国協会、1993、520頁）。
- (19)「（益田競馬の1960（昭35）年）当時のスタートは発走委員の赤旗による駐立発走であったので、全頭が一線に並んで同時にスタートするのがむずかしく、先を争ってとび出す場合が多く、カンパイを2度、3度、繰返すことが度々であった。馬もカンパイになって途中で止められると、スタート地点に仲々（ママ）戻らなくなり、それを無理矢理追戻していた。…発走が30分も遅れて冷や汗をかかされたことがあった。…京都競馬場から、バリアーのスタート台を譲り受けて使用し、スタートが良くなったといってファンに喜ばれたものである。」（地方競馬全国協会、1974、501-502頁、（）内筆者）。なお、同書227頁によれば、益田競馬場に発馬機が貸付されたのは1965（昭40）年である。
- (20)日本は中央、地方競馬双方とも内厩制度をとっている。競馬会が管轄する厩舎を調教師に貸し付け、調教師は馬主から預かった馬を入厩させ管理し、レースに出走させる制度。これに対して、どこで競走馬を管理してもよいのが外厩制度。（鈴木、2000、234頁）。
- (21)競走馬の飼育管理補助が、認定された認定厩務員にのみ認められることとなったのは、1977（昭52）年の地方競馬実施規則の改定によるが、「昭和40年代になって、厩舎管理を含む地方競馬の施行管理体制の改善強化に対する要請が高まっていた」（地方競馬全国協会1993、55頁）。1971（昭46）年度の競走実務研究会で農水省から名義貸しや暴力団、薬物使用を排除するためとして、厩舎管理規則の制定整備、外厩の整理促進、調整ルームによる騎手のレース前日の隔離が挙げられ、対策が急がれていた（地方競馬全国協会、1993、21頁）。馬の手入れがしづらくなったのは、「外厩の整理促進」によるものと思われる。
- (22)具体的に益田競馬の場合、「昭和48（1973）年度には厩舎団地の整備にあわせ逐次外厩を廃止していった…在厩馬も昭和47年度138頭、48年度189頭、49年度212頭、50年度251頭と着実に増え、競馬場としての体裁を整えることができた。」（地方競馬全国協会、1993、310頁、（）内筆者）とある。
- (23)1972（昭47）年に調整ルームを建設するため、益田競馬に地方競馬全国協会から500万円（以内）の助成があった（地方競馬全国協会、1993、22頁）。
- (24)「国営総合農地開発に伴う農地利用事業…農地造成が最初に着手された小野地区では、…農事組合法人喜阿弥ぶどう生産組合（組合員10戸）、小野葉煙草生産組合（組合員10戸）の二協業が、51年度から各々4億円の事業費で、20haの農地と生産諸施設の整備に取り組んでいる。農地開発事業が各地区で進行すれば、こうした大型の農場を経営する組合や農家が出現する予定で、この開発事業の早期完了が期待されている。」（益田市誌編纂委員会、1978、702頁）。
- (25)1981（昭56）年から、1986（昭61）年まで、益田競馬は赤字を計上した。

- (26)初期の益田競馬には家族連れが多かったことが推察される。例えば、以下の記述。「益田では4月の節句競馬といって以前から多くの花見客が押しかけて、青天井のスタンドで弁当を開いてのんびり見物していたのもこの時期（1960（昭35）年）である。」（地方競馬協会、1974、502頁、（）内筆者）。
- (27)1987年から1995年まで益田競馬で騎乗。
- (28)当時、出走回数日本記録250走を達成し、1987（昭62）年11月に引退。
- (29)2001年6月。
- (30)この制度は、1976年から始まり（地方競馬協会、1993、315頁）、中止の2002年まで続いた。共同購入制度とは、毎年、年1度、北海道から2-30頭の売れ残った馬を一括で購入し（資金不足のためなるべく安い馬を購入していた）、その馬を益田競馬の馬主に募集をかけ、抽選馬として買い取ってもらい、出走させる制度。馬の購入代金のうち、半分から4割を競馬特別会計からの補助金として支出していた。新しい馬を導入して競馬場を活気付けるために行なっていた。優秀な馬は出世して福山競馬に移籍するが、この抽選馬の場合は、補助金を根拠に1年間は益田競馬から移籍できないという制約があった（大概は6月デビューで次の年の6月まで）。1年後には抽選馬の半数が移籍してしまうこともあった。抽選馬だけに限定して出走させるレースも開催されていた（2008年10月実施、益田市役所へのヒアリング調査による）。
- (31)2003年11月廃止。
- (32)ちなみに、1989年の益田競馬における最高賞金額は50万円であり、全国で最も安い。次に安いのは荒尾など2競馬場の250万円。1000万を超える競馬場がほとんどであり、最も高いのは中京の4000万円である（地方競馬全国協会、1990、16頁）。
- (33)2002年の最後の年度は、1着賞金10万円、2着3万円、3着1万5千円となっていた。出走手当は2万円、一ヶ月の厩舎への支払い・預託料は8万円ほどであったという（2008年10月実施、益田市役所へのヒアリング調査による）。
- (34)2001年の大分県の中津競馬の廃止のこと。突然の廃止決定・発表や関係者への補償金の支払い拒否や関係者による訴訟などで物議をかもしした。
- (35)2002年8月16日をもって休止し、2002年度末に廃止。
- (36)入場者数は4621人で、過去最高であった。

〔参考文献〕

『島根県統計書』（各年度版）

鈴木和幸（2000）『まるごとわかる競馬の事典』池田書店

地方競馬全国協会（1972）『地方競馬史 第一巻』地方競馬全国協会

地方競馬全国協会（1974）『地方競馬史 第二巻』地方競馬全国協会

地方競馬全国協会（1993）『地方競馬史 第四巻』地方競馬全国協会

地方競馬全国協会（1990）『1990地方競馬のあらまし』地方競馬全国協会

益田市誌編集委員会（1978）『益田市誌（下巻）』益田市

Transition process of local horse racing :

A case of Masuda Horse Racing

SEKI Kohei, HIRATA Naoki

(Faculty of Law and Literature, Shimane University) · (Masuda Medical Association Hospital)

Keywords : local horse racing, oral history, Masuda Horse Racing

{ Abstract }

This paper is a record of an oral history from a racehorse owner of Masuda Horse Racing. This paper intends to clarify the transition process of a local horse racing. The present state of local horse racing has been formed after the period of ceremonial horse racing and agricultural use.